

優秀賞

同じ青空の下

釜石市立唐丹中学校 3年

留畑 瑞穂

二〇一八年三月四日。私は、ガザの子供達のために凧を揚げた。ガザの人々が、毎年東日本大震災の被災地に向け、凧を揚げてくれていることに応えるために。津波で被災した、元唐丹小学校のグラウンドには、小さな子から高校生まで、市内からたくさんの人が集まっていた。青空へ高く凧を揚げようとグラウンドを駆け回る人達は皆、笑顔だった。

私はガザについてよく知らなかった。「なぜ、ガザの人たちが凧を揚げているのか。」そんな疑問を持ち、調べてみた。図書室にあった、『ガザ 戦争しか知らないこどもたち』という本には、著者がガザで出会った人々、風景が載っていた。八メートルの壁に囲まれたガザの風景は、建物が崩壊し、道にはがれきが積み上がっており、東日本大震災直後の様子とよく似ていた。しかし、その光景を創りだしたのは、自然の脅威ではなく、人間だ。ガザでは何度も戦争が起きているのだ。

ガザに暮らす人々は一八〇万人。そのうちの七十パーセント以上がパレスチナ難民とその子供達。壊れた家で生活し、「ガザを出て勉強したい。」と話すイマン。毎日泣きながら父の帰りを待つナダ。家が崩壊し、逃げる途中で死体を見たというモハメド。ガザに住む子供達は皆、このような経験をしているというのだ。

私の住む町が、押し寄せる津波にのみ込まれたのは小学校一年の時。後に残ったのは、がれきの山と、電気も水もない不便な生活。そして、復興への長い道のり。その復興は世界中の多くの人に支えられ、成されてきた。だからこそ分かる、ガザの苦しさ。

そんなガザなのに、この本の一文に目がとまった。We build Gaza again. (それでも私はガザを再建する) ガザの人々は、この戦争からの復活をあきらめることなく、ガザの新しい未来を創りだそうとしている。

ガザについて、私が知っていることは限られている。だが、ガザで生きる人達が本当に辛く、苦しいということは間違いないだろう。そんな人達が、七年もの間、日本の被災地へ凧を揚げ続けている。自分たちも大変なのに、他の国の災害と一緒に悲しみ、勇気づけてくれるのだ。そんな人達がいたことに、私は今まで気づけていなかった。

私はこの経験を通して、苦しんでいる人達に、目を向けるきっかけを得た。私達が生きる世界は、誰もが安心して過ごせる世界でなければいけない。そのために、今、どんなことが世界で起きているのか知らなくてはならない。中学生ができることは少ないかもしれないが、未来を創っていくのは私達だ。

ガザと釜石は、全く別の世界ではなく、同じ空で繋がっている。世界中の人々が見上

げるのは、同じ平和な青空であってほしい。その空の下で、一緒に笑い合い、助け合いながら生きる未来を、私は考えていきたい。